Pieces of Heart

八神大輔

STAY

（チケット、無駄になっちゃったね）
（無駄じゃないよ）
　少しかすれた彼の声が耳によみがえり、小夜美は頬杖をしたままため息をついた。
『四回目』
「……え？」
『ため息。それで四回目だよ。どうかしたの？』
　大学の図書館で、小夜美は休んでいた間のノートを友達に見せてもらっていた。しかし、すっかり手のほうがお留守になってしまい、いつの間にか窓の外をぼんやり眺めていたようだ。
「あ、ごめんごめん。なんでもないのよ」
　慌てて笑顔を作り、再びノートに向かう。けれど意識がどうしてもほかのことに向かってしまい、小夜美の口からまた吐息が漏れた。
『五回目』
　小夜美とゼミを同じくする彼女は、肩をすくめると、ノートを閉じてしまった。
『あ……ごめん、許して』
「これは貸してあげるから、持って帰っていいよ。今日はそんな気分じゃないでしょ？」
『ほんと？　……ごめんね、ありがと』
　ノートを鞄にしまう小夜美を、彼女は興味深げに見つめた。その視線に気づいて、小夜美が決まり悪げに首をかしげる。
『どうしちゃったの？　ひっさびさに学校出てきたと思ったら、ぼーっとしっぱなしでさ』
「え……そ、そうかな。今までのんびり過ごしちゃってたから、ギャップが……」
『こ・よ・み・ちゃ～ん』
　両手を組んでその上に顎を乗せ、彼女はやや上目遣いに小夜美の顔を覗き込んだ。心配しているというより、嬉しそうに目が輝いている。
『私の目はごまかせないよ？』
「……どういうこと？」
『恋、しちゃったんじゃないの？　小夜美ちゃん』
「……！」
　耳まで赤くなる小夜美。それを見て、彼女はここが図書館だということも忘れて、大笑いした。
『あー、図星だぁ。ゼミの男連中が聞いたら悲しむねー』
「ち……違うよ、そんなんじゃなくてっ」
『じゃなくて？』
『じゃなくて……でも……そうなのかな……？』
　だんだん小夜美の声がか細くなっていく。うつむいてしまった小夜美に対して、彼女はずいっと身を乗り出した。
『悩んでるねー。よしっ、おねーさんが相談に乗ってあげよう！』
「……同い年じゃないの……」
『細かいことは気にしないの。で？　なになに？』

＊

「それって告白じゃないの」
『やっぱり……そう思う？』
　強引さに押し切られたのと、やはり誰かに聞いてもらいたかったことがあって、小夜美はマリンパークでの出来事を彼女

に話して聞かせた。
　小夜美と来られたのだから、チケットは無駄じゃなかった。
　智也のその言葉に対し、小夜美は曖昧に頷いただけだったのだが……。
「なるほどね……。でも、その子、頑張ったよね。おねーさんは彼を応援してあげたいなっ」
「え……どういうこと？」
「自分だってわかってるんでしょ？　酷なことしたって」
「それは……」
「その子は小夜美のことが好きなのに、ほかの女の子をデートに誘えって、チケットあげちゃったんだもんね」
「……」
「でもそれでへこまないでさ、そのチケットで小夜美を誘うなんて、根性あるじゃない。私は好きだなー、そういう子」
「もう、他人事だと思って」
　憮然とした顔で横を向いたのは、彼女に云われるまでもなく、わかっていたからだ。
　でも、あのときはほんとに、気づきもしなかった。ただ、弟の恋愛を応援してあげたいようなつもりで。そりゃあ、ちょっとだけ寂しかったけど……。
「……歳下なんだよね」
　横を向いたままで、小夜美が呟いた。
　だから？と訊き返すように、向かいの席の彼女が首を傾ける。
「歳下だから嫌だってわけじゃないんだけど……、三歳下っていうのがね……」
「……弟さんのこと？」
「うん……」
　目を伏せて、小夜美はうつむいた。そのまましばし沈黙が訪れる。
　小夜美の友達は背もたれに体を預け、三つ編みにした栗色の長い髪の先を手でもてあそんでいた。髪を下ろせばきっと素敵なのに、と小夜美はいつも思うのだが、彼女は「邪魔くさい」と笑い飛ばしてしまう。そうしながら、彼女は口を開いた。
「歳下って、めんどくさいよね」
「え？」
「基本的には甘えたいくせにさ、時には立ててあげないとすねるし。めんどくさいよ」
「……」
「でも、それは女のわがままかも。女も甘えたいし、甘えさせてあげたいものね。最悪なのは……」
「？」
「相手の目に映っている自分を憐れんでるだけって奴かな。まあ、これは相手が歳下だとかは関係ないけど」
「……！」
　さりげなく吐かれた言葉に、小夜美は胸を衝かれる衝撃を覚えた。
　そう、それが怖かった。彼を見ていると、どうしても弟を思い出してしまう。
　照れくさくて、弟には優しくなんてしてやれなかった。あの日も喧嘩したままで……逝ってしまった。
　あたしはその償いがしたくて、智也のそばにいるのかもしれない。彼の本当の想いなんかおかまいなしで。
「なーんて。私も偉そうなことは云えないんだけどね」
　小夜美がうつむいて黙りこくってしまったのを見て、彼女はわざとおどけて見せた。
　小夜美は黙って首を横に振り、小さく呟いた。
「もう……逢わないほうがいいのかな」
「……」
　困ったように、眉をしかめる彼女。
「さあ……それは私にはわからないけど」
　いったん言葉を区切ると、彼女は小夜美の顎に手をやって上を向かせた。少し驚いて小夜美が彼女の瞳を見つめる。瞳

の中に映る自分。
「小夜美は、彼を見つめるとき、誰を見てた？　自分？　弟さん？　それとも、彼自身？」
「それは……」
小夜美は彼女の手から離れて、目をそらした。またうつむいて、言葉を続ける。
「それは……」
繰り返したが、その続きは出てこなかった。
わからない。弟を重ねて見ていたのは確かだったが、果たしてそれだけだったかどうか。心なんて、あとからどうにでも説明をつけられるような気がする。
そんな迷いを見透かしたように、彼女は微笑んだ。
「わかんないならさ、ひとりで勝手に決めるのはやめなよ。それこそ彼に失礼じゃない？」
「……」
「もう一度彼に逢って、彼の目の中の自分を見て、考えてみれば。……あ、ごめん、私、もう行かなきゃ」
云いながら、彼女は立ち上がった。荷物を手早く片付けて、脇に置いたヘルメットを取る。
「ノートは次のゼミのときでいいから」
「あ……うん、ありがとう、たまちゃん」
「じゃね」
手を振って立ち去る彼女を見送ったあと、小夜美はまた大きくため息をついた。
「六回目、か」
自分で数えて、小さく笑う。そして荷物を片付けて、席を立った。

＊

考え事をしていたら、一駅乗り過ごしてしまった。そのままなんとなく降りてしまい、駅前の商店街をぶらぶらと歩く。気分転換にいいか、と思ったのだが、結局、考えるのは智也のことだけだった。
そのとき、視界をふと見覚えのある後姿が横切った。
「……嘘？」
あんまり考えすぎて、幻覚が見えたのかと思った。
違う。本物だ。こちらに気づいた様子もなく、智也が歩き去っていく。
考えるまでもなく、小夜美は走り出していた。
「智也クン！」
彼も考え事をしているのか、小夜美の呼びかけにも気づかないで、足早に歩いていく。人の流れにその姿を見失わないよう、必死で目で追いながら小夜美は駆けた。
「智也クン！」
やっと追いついた。腕をつかむと、目を丸くして智也が振り向く。
「……小夜美さんだ」
「小夜美さんですよ。……もう、智也クン、歩くの速すぎるよ」
息を切らしながら答える。思わず、笑顔がこぼれていた。
「逢いたかったんだ」
そんな言葉が、自然と口をついて出てくる。
そう、逢いたかった。逢いたかったんだ、あたしは、智也くんに……。
少し驚いた表情の智也を、小夜美はじっと見つめた。
瞳の中には、自分が映っている。そして自分の瞳には、智也が映っているはずだ。
そのことが、なぜだか無性に嬉しかった。
彼を傷つけてしまうかもしれない。だけど、だけど、彼のそばにいたい。彼とふたりで答えを出す、その日までは。
冬の気配をのぞかせる北風に吹かれながら、小夜美は、強くそう考えた。

了

あとがき

メモオフ、小夜美ねーさんシナリオ終了記念に勢いで書きました。エンディング見て、速攻で書き始めたのって初めて。一日で書き終わったのも初めて、かな。
今回も、実はすごい反則しています……って、そんなん読んだらもうバレバレ（笑）。
まあ、今回はお遊びってことで、勘弁してください。
このふたりはきっとこれからがすごい大変なので、その辺もいつか書けるといいなあと思います。
ご感想などいただければ、幸いです。

二〇〇一・三・一〇

good times, bad times

笑顔をよく見せるようになって、詩音はたちまちクラスの――特に男子の――人気者になった。この休み時間もまた、読書中の詩音を何人かの男連中が取り囲んでいる。

詩音のためには喜ぶべきことなんだろうけど――、俺は、つい憮然とした表情になってしまう。

中でも一番許せないのは、これだ。

『詩音ちゃんはさ……』

詩音ちゃん呼ばわりだとぉ？　詩音と呼んでいいのは俺だけだっ！

そう叫びたいのをぐっとこらえて、横目で様子を見守る。詩音が助けを求めるようにこちらをちらっと見たような気がしたが、連中を追い散らすのも大人気ないような気がするし、それに気恥ずかしい。

授業開始のベルが鳴り、連中も渋々、席に戻っていく。俺と詩音は、同時に安堵のため息をついた……ような気がした。

＊

すでに季節は冬と呼んでもいい頃になっている。外で食事をするにはもう北風が厳しかったが、それでも彼女はそのいつもの場所で、文庫本を片手に弁当を広げていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

パンを片手に俺が声をかけると、詩音は微笑みながら顔を上げて答えた。

他人行儀な挨拶、と人が見れば思うかもしれないが、俺たちにはこれが自然だった。

詩音の隣に腰掛けて、パンをかじり始める。詩音もまた文庫本に目を落として、続きを読み始めた。

いつもどおりの、静かな時間。普段ならなんの居心地の悪さも感じないんだが、今日の俺はなんだかそわそわしていて、詩音に話し掛けてしまった。

「なあ、どうして今でも、ここでひとりで弁当食べてるんだ？　女の子の友達もできただろ？」

そう云うと、彼女は本から目を上げて、不思議そうに俺を見つめた。

そんな風にまっすぐに視線を向けられると、思わず心臓が高鳴ってしまう。

「ひとりじゃ、ありませんよ？」

「……え？」

智也さんが、来てくれます」

朝になれば日が昇る。そんな当たり前のことを云うように、彼女は俺に答えた。

俺が言葉を失っていると、詩音はまた本を読みながら、話を続けた。

「それに、教室にいると、最近、本が読めなくって」

「……ああ、そうだよな、ほんと、迷惑な連中だ」

激しく同意しながら、俺はふと気づいた。ひょっとして俺も今、詩音の読書の邪魔をしてるのかな？

「えっと……俺も、邪魔かな？」

詩音が、三度顔を上げる。そして手にしていた本を閉じてしまった。

『どうしてですか？」

問い返す詩音の表情は、本当に不思議そうだ。

彼女にとって、昼休みにひとりで座っていれば俺がやってき

て、本を読んでいる間、俺がそばにいて……そんなことは、当たり前のことなんだろうか？
だったら、それは……すごく……。
俺はにやけているのか、泣き出しそうなのか、自分でもよくわからない表情をしていたと思う。
詩音がまた小さく微笑んだ。
「今日の智也さん、なんか変ですよ？」
そう云ったあと、かわいらしくあくびをした。
「あ、ごめんなさい。通学時間が長くなって、電車の中で本が読めるのはいいんですけど、朝が早くて……。それに、あんまり学校で本が読めなくなったから、つい夜更かししちゃうんですよね」
「そういうときは授業中、寝ればいいんだよ」
「授業中も本を読んでます」
……そういえばそうだった。
詩音はゆっくりと体を傾け――、俺の肩に、こつんと頭を乗せた。
風が彼女の長い髪を揺らし、俺の頬をくすぐる。甘い香りに、包まれているような気になった。
「しばらく……こうしてても……いいですか……？」
俺の返事を待たずに、もう彼女は寝息を立てていた。
――俺は、前〈進むために彼女の手を取った。
だけど、こうしていると、どうしても考えてしまう。このまま、時間が止まればいいと――。

＊

そして、今日もまた詩音の周りには男連中が群がっている。
その中のひとりが、詩音にぶしつけな質問をした。
「詩音ちゃんは、三上とつきあってるってほんとなの？」
「……え……」

頬を染めて、当惑する彼女。けれど、次の瞬間にははにかんだ笑顔を浮かべて、頷いていた。
「はい」
連中から失望の吐息が漏れる。同時に、俺は拳を握り締めて叫びたい気分になった――無論、やらなかったけど。
その代わりに、立ち上がって詩音の席まで行く。敵意を持った眼で振り返る奴らを、しっしと手で追い払った。
「そういうわけだ。さっさと散れ、お前ら」
「ちぇーっ。独り占めかよ」
「当たり前だ。それに詩音は今、本読んでるだろ。邪魔するなよ」
ぶつぶつ云いながら、連中は解散した。
振り返ると、俺のことをじっと見上げている詩音と目が合った。急に自分のやったことが照れくさく思えて、目をそらしながら頭をかく。
「ありがとうございます」
「いや……これで、読書に専念できるよな」
「そうではなくて……」
「……え？」
「……なんでもありません」
うつむいた詩音は、少し頬を赤らめながらも、読書を続けている。
俺は詩音の机の端に腰掛けて、何をするでもなくぼんやりと立っていた。
時間は、止まらなくてもいい。
こうして、ふたりの時間を積み重ねていけるなら。
そんなことを、考えながら。

了

あとがき

詩音シナリオクリア記念です。このままひとり一本書ければすごいけど、さすがにそうはいかないでしょうね（笑）。

二回目のプレイでは、とりあえずやっぱり王道狙いで唯笑かな、と思っていたのに、気がつけば足繁く図書館に通ってしまっていました（笑）。

詩音の話はまた書きたいですね。彼女にはもうつらい想いはさせたくないので、今度もこういうほのぼのしたものになるといいんですけど……。

ご感想などいただければ幸いです。

二〇〇一・三・一一

雨上がりの夜空に

あいにくの雨の中を、唯笑は白い傘をさして歩いていた。
彼岸でもなければ、霊園には人気がない。
唯笑にとっても、今日は特別な日というわけではなかった。ただ、彩花に会いたくなったとき、ここへ来ていた。墓前でしばらく佇み、言葉をかけていく。はたから見れば独り言にしか見えなかっただろうが、唯笑には彩花が聞いていてくれることがわかっていたし、時には彩花の声が聞こえるような気もしていた。
そして、今日もまた、誰もいないだろうその場所へやってきた。
……しかし、今日、そこにいるのは、唯笑だけではなかった。
（彩ちゃん……？）
ふと彩花自身がそこに立っているような錯覚を覚えた。
だが、すぐにまったく違う人物であることがわかった。似ているのは、髪の長さぐらいだろうか？　雨に濡れるのもいとわず、墓石を掃除し、花を捧げている、そのやや冷たく整った美貌を、唯笑は茫然と見つめた。
「双海さん……？」
呟きながら、ゆっくりと歩み寄る唯笑。その足音に気づいて、詩音が振り向いた。唯笑と目が合っても表情を変えず、頭を下げる。
「こんにちは」
「あ……こ、こんにちは」
慌てて唯笑も挨拶を返す。詩音はそのまますぐに向き直り、墓地の清掃を続けた。
最後に彼女が線香をあげ、手を合わせるまで、唯笑は手伝うことも声をかけることもできずに立ち尽くしていた。
「……どうぞ」
詩音の声に、ふと我に返る。気づくと詩音は立ち上がり、場所を譲っていた。
「あ……ありがと」
答えながらも、唯笑はその場を動けなかった。詩音の顔を、じっと見つめてしまう。詩音が小首を傾げた。
「なんでしょう？」
「あ……ごめんね。でも、どうして？　……あ、智ちゃんと来たの？」
それしかありえないと思った。智也はどこにいるのだろう、と周りを見回す。
しかし、詩音の答えは唯笑の予想を裏切っていた。
「いいえ。私ひとりです」
「そう、やっぱり……って、ええ!?　どうしてぇ？」
場所にそぐわない大声を出した唯笑を、詩音はやや咎めるように見た。そしてその視線を、彩花の墓に転じた。
「私にできるのは、これぐらいですから」
その静かな一言に、唯笑は激しい怒りを覚えた。
なんて……なんて傲慢な台詞だろう。
「それは……彩ちゃんから智ちゃんを奪った、償いってこと？」
「……」
唯笑の痛烈な言葉に対して、やはり詩音は表情を変えずに、静かに唯笑を見つめ返した。
その静かな瞳を見ていると、さきほどの自分の台詞に、嘘があったように唯笑には思えてきた。
（唯笑から……智ちゃんを奪った……）
そう云いたかったのではないか。唯笑は自己嫌悪に唇をか

んだ。
「……違います」
　唯笑の葛藤も何もすべて見通したようなタイミングで、詩音が答える。やはり表情は変わっていないが、少し悲しげに目を伏せているように見えた。
「あのひと……智也さんは、過去を振り切って、私を選んでくれました。そして、私を傷つけないために、過去を一切見ないようにしています。……でも」
「……」
「そんな……風に、過去を切り捨てる必要はないんです。囚われてさえ、いなければ。今の私は――、智也さんを、信じられますから」
「……」
「智也さんも……もう少し時間が経てば、そのことをわかってくれると思います。だから……それまでは……」
　そこまで云ったとき、詩音の頬に一筋、涙が伝った。
　その涙を、美しい、と唯笑は思った。
（ありがとう）
　思わず口をついて出そうになった言葉と――、彩花の声が、重なったような気が、した。
「どうして、泣いているんですか？」
「……え？」
　詩音に云われて、初めて気がついた。大粒の涙が、次々と零れ落ちている。
　一方の詩音は、すでに涙の跡もなく、不思議そうに唯笑を見つめていた。だが、唯笑には詩音が自分を気遣っているのがわかった。
「ううん、なんでもないの。ありがとう」
　両手で涙をぬぐいながら、唯笑は笑顔を浮かべた。
　今なら――、今なら、心からふたりを祝福できるように思えた。
「智ちゃんが双海さんを好きになった理由、わかったよ」
「……え？」
　これまで表情を変えなかった詩音が、戸惑ったように視線をさまよわせた。そして、はにかんだ笑顔を浮かべて、頭を下げた。
「ありがとうございます」
「ほえ？　なんでお礼云うの？」
「あ……なんとなく……」
「変なの」
「……変ですね」
　顔を見合わせて、ふたりはひとしきり笑った。
　彩ちゃんも笑ってる。唯笑は、そう思った。

＊

「それじゃあ今坂さん、ごきげんよう」
　霊園の出口で、詩音は丁寧に頭を下げて挨拶をした。
　唯笑は手を振りながら、答える。
「うん、またね。……あ、唯笑って呼んでよ」
「はい。私は詩音です」
「詩音ちゃんかあ……。綺麗な名前だよね。うらやましい」
「ありがとうございます。……でも、唯笑もいいお名前だと思いますよ」
　微笑みながら、詩音は云った。
　唯笑は誉められたことより、その笑顔が嬉しくて自分もつい笑ってしまう。
「えへへ、そうかな」
「はい。どんなことがあっても、いつも笑っていられるように、と願いを込めてつけられたと、智也さんから伺いました」
「あ、どーせバカにしてたんでしょー。いつでもへらへら笑ってるとか云って」
　そのときの様子を想像して、膨れっ面になる唯笑。しかし、詩音は真顔で首を振った。

「いいえ。とても大切そうにお話していました」
「……えぇ？」
「私、少し悔しかったです」
「……」
　真顔で話す詩音に対し、どんなリアクションを取ったものか、唯笑は困ってしまった。
　詩音はそんな唯笑の困惑にお構いなしに、先ほどと同じように頭を下げる。
「それじゃあ唯笑さん、ごきげんよう」
「あ……ごきげんよう……って、そういうバカ丁寧なのもやめない？」
　顔を上げる詩音。表情を変えないままで、
「これは癖です」
「あ……そう……」
　その一言を最後に、詩音は踵を返して歩き去った。
　唯笑はその後姿をしばらく茫然と見送っていたが、詩音が角を曲がろうとしたところで、大きく手を振りながら大声を張り上げた。
「ばいばーい！」
　その大声に驚いたように詩音は足を止める。そして唯笑を振り返ると、小さく手を振った。
　ばいばい、と云ったのかな？と考えて、唯笑は少しおかしくなった。
　傘を下ろして、空を見上げる。
　雨は、いつの間にかやんでいた。

了

あとがき

唯笑シナリオクリア記念……にはなってませんね（笑）。
正直云って、唯笑タイプ、『久遠』で云えば栞ですね、こういうキャラは私にとってかなりプライオリティが低いんですよ。なので、どうやって動かせばいいのかわからないんです。唯笑メインで一本は……難しいなあ。
全然違う理由ですが、みなもシナリオも書けないと思います。悲しすぎるから（涙）。
ご感想などいただければ幸いです。

二〇〇一・三・一一

約束

海の見える公園。長いキスのあと、瞳を見つめると、詩音は恥ずかしげにうつむいた。
その姿がとても愛しく、智也は詩音を胸に抱きしめる。詩音も穏やかに微笑みながら、智也の胸に頬を寄せた。
幸せな時間は、けれど、あっという間に過ぎ去ってしまう。公園の時計をふと見ると、九時を指そうというところだった。
「そろそろ……帰らなきゃ、かな」
「……」
詩音の顔色がさっと曇った。寂しさのせいだろう、と智也は彼女の肩を抱きながら、歩き出そうとした。
「送っていくからさ。……さ」
「……」
しかし、詩音は動こうとしない。智也がその顔を覗き込もうとすると、再び智也の胸に顔を埋めた。
「……詩音？」
「今夜は……帰りたくありません……」
「えっ……」
智也はその言葉に硬直した。
それって……つまり……そういうこと？
ええっ……でも……それは……。
困惑と動揺と焦燥と……そして期待とで、智也は何も云うことができなかった。我ながら情けない、とは思うのだが、思考がぐるぐると空回りし、詩音の肩を抱いたまま、指一本動かすことができない。
そんな智也の異常に気づいた様子もなく、詩音が言葉を続けた。
「今日は……父が帰ってくるんです」
「あ……そうなんだ」
反射的に答えたことで、金縛りに近い状態が解けた。
しかし、その意味をよく考えると、疑問がどんどん膨らんでくる。
お父さんが帰ってくるなら、外泊なんてなおさらやばいじゃない？　……じゃなくて！
「どうして……？　前は、お父さんが帰ってくるの、あんなに楽しみにしてたじゃないか」
そう、それは智也が初めて詩音の笑顔がこぼれるのを見たときだったかもしれない。久しぶりに帰ってくる父のために手料理を作りたい、そう云って小走りに帰っていった彼女。
それなのに？
智也の疑問に、詩音は間接的に答えた。声がかすれて、風にかき消されそうになる。
「父は……女の人を、連れてくるそうです」
……そういうことか。智也は安堵と失望が半ばするため息をつくと、詩音をベンチに促した。詩音の肩を抱いたまま、並んで腰掛ける。詩音はやはり心細げに、智也に寄り添っていた。
「以前、話してくれた人だね？　お父さんと同じ研究所にいたっていう……」
「そうです」
詩音を残して海外に去ったあと、詩音の父は交際中の女性がいることを詩音に告白した。その女性を連れてくるということは……いよいよ再婚に踏み切ることになった、ということだろう。
「詩音……」
「わかっているんです」

智也の言葉を遮り、詩音は叫ぶように云った。
智也を見つめるわけでもなく、蒼白な面持ちで、闇を見据えている。
『理屈では……わかっているんです。父は、男手ひとつで私をここまで育ててくれました。もう一度、幸せになる権利があります。だけど……だけど……！』
嗚咽で、声が震える。
智也はもう一方の手を前から回し、詩音の体を抱きしめた。詩音は震える手で、智也の体にすがりついてくる。
『だけど……私の母は……ひとりだけです……！　私に紅茶を教えてくれて……、髪を、いつも手入れしてくれた……たったひとりの……』
それ以上は言葉にならず、詩音は小鳥のように智也の腕の中で震えつづけた。
智也は彼女の髪を、体を優しく撫でながら、囁いた。
『詩音の気持ちはすごくわかるよ……。自分と、お父さんだけは、お母さんのことをずっと覚えていてあげたい……そう、思うんだろ？』
小さく、詩音が頷く。智也は抱きしめる腕の力を強めた。
『わかる……。俺も……そう、考えていたから……』
『……！』
はっと詩音が顔を上げる。涙に濡れた目で智也を見上げると、彼は優しく微笑んでいた。
『ごめんなさい……。ごめんなさい、私……』
智也は黙って首を横に振る。そして詩音の頬の涙を指でぬぐってやりながら、言葉を続けた。
『彩花を失くした痛みを忘れること……それは罪だと思ってた。でも、そうじゃない。そうじゃないんだ……』
『智也さん……』
『そのことを、詩音が教えてくれた。だから今度は、俺が教えるよ。お母さんは、詩音の、そしてお父さんの心の中にいる。忘れたり、失くしてしまったりするものじゃない……。ずっと、いるんだ……』
『私の……中に……』
『そう……』
詩音はまた静かに、智也の腕の中に体を預けてきた。智也もまた強く抱きしめる。まるでひとつの彫像のように、ふたりはその姿勢のまま強く互いを抱いていた。
やがて、瞳を閉じて、詩音が呟いた。
『人が亡くなるというのは……不思議なものですね……』
『……』
『母が亡くなったとき、私は何が起こっているのか、わかりませんでした。葬儀を終え、埋葬を終えても、みんな何してるんだろうって……そんな感覚しかなくて。涙さえ、流さなかったかもしれません』
感情のこもらない声で、詩音は淡々と続ける。智也もただじっと耳を傾けていた。
『だけど……日常の暮らしが戻ってきて……いつものお茶の時間に、私、云ったんです。『お母さん、お茶にしましょう』って』
『……』
『でも、答えはなくて……。そのとき、初めてわかったんです。ああ、お母さんはもういないんだ、って……』
静かに、詩音の瞳から涙が流れる。智也がいくらぬぐっても、その涙は静かに流れ続けた。
『つらくて……つらくて……、形見の品や、思い出を、大事にしました。母はもういないから、だから、大事にしなきゃいけないと。……でも』
自分の胸をそっと押さえて、詩音は微笑む。
『ここに……いるんですね』
『……そうだ』
その微笑を、守りたい。詩音を抱きしめる手にその想いを込めて、智也は云った。
彼もまた、泣いていたかもしれない。

「何も失うものなんてないのさ。たとえ遠くに離れたって、詩音の心には、俺が……」
そこまで云ったとき、詩音がふいに智也の腕を振り払った。
驚く智也を、詩音は涙でいっぱいの瞳で強く見つめる。
「嫌です……！」
「詩音……？」
「私は嫌です！　そんな……あなただけは……嫌です……！
ずっと……ずっと……、そばにいてください……」
「詩音……」
智也は腕を伸ばして、詩音をもう一度抱きしめた。
愛しさが、胸に広がっていく。
そうだ、この笑顔を守るために、俺は……。
「ずっと……そばにいるよ……」
耳元で囁く。詩音は智也がそこにいることを確かめるように、背中に回した手に力を込める。
「約束……ですよ……？」
「ああ……約束だ」
かつて果たせなかった約束を、智也はもう一度口にした。
彼女と前へ、歩いていくために。握ったこの手を、離さないで。
「約束だ……」
繰り返し呟いて、智也は詩音に口づけをした。

＊

気がつくと、時計は十時を回っていた。
智也は詩音を促して立ち上がらせる。
「さ……帰ろ」
「はい……」
立ち上がったものの、詩音はまだ動けない。うつむいて、智也の服のすそを握っていた。
「一緒に……行ってもらえませんか？」
「え……？」
「そうしたら……きっと、勇気が出せるから……」
うつむいたまま、か細い声で続ける詩音。智也は笑顔で、詩音の手を取った。
「……わかった。じゃあ、一緒に行こう」
「――はい！」
とたんに、詩音は顔を上げて満面の笑顔を見せた。
その笑顔を見つめ返し――、ようやく、智也は自分のやろうとしていることに気づいた。
「え……っと、でも、それって、お父さんに挨拶するってことだよね……？」
それだけではない。近い将来、詩音の母になる人とも。
急に緊張して冷や汗をかいた智也を、詩音は相変わらず笑顔で見上げている。
「はい、そのとおりです」
……はめられたかな？　思わず一歩後ずさりする智也。けれど、その手はしっかり詩音に握られている。
「約束ですよ？」
いたずらっぽく詩音は微笑む。詩音のこんな表情が見られたのならいいか。智也はそう考えて、覚悟を決めて歩き出した。もちろん、詩音と手をつないだままで。
「そうだな、約束だ」
詩音が喜びに頬を染めて寄り添ってくる。
ふたりは手をつないで、前へ歩き出す。これからも、ずっと。

了

あとがき

詩音シナリオ中盤では、彼女が母親を亡くしていることが、智也との接点なのかな？と思っていました。ところがシナリオが進むにつれてそんな話は全然出てこなくなって、伏線でさえなかったって感じで終わってしまいました。前半、「母の形見」にあれだけこだわっていたのはなんなんだろう？と、正直、思いましたね。

という引っかかりが、この話を作るきっかけでした。

しかし、俺の本命は小夜美ねーさんなんだー！……と云っても、全く信用されない状況になりつつあるような気がする今日この頃（笑）。この暴走はまだ続きます（笑）。

ご感想などいただければ幸いです。

二〇〇一・三・一三

Angel

小雨がぱらぱらと降り注ぐ中、黒いタキシード姿の智也は、傘もささずにもう長いことそこに立ち尽くしていた。
二時間は経っただろうか？　何を語りかけるでもなく、ただじっと――、彩花の墓碑を見つめ続けている。
そして、さらに一時間が過ぎようとした頃、ようやく、手に持っていた花束を墓碑の前に置いた。
優しく、悲しい微笑を浮かべる。
そろそろ、約束の時間だった。
彩花……」
（ありがとう、智也）
自分の呼びかけに、彩花が答えるのが智也にはわかった。
そっと背中から彼女が包み込んでくれているような、そんな感覚を覚える。
（来てくれて、嬉しかった。……ほんとだよ？　智也の今日の姿が見られて、私、ほんとに嬉しいの。……でもね）
「でも？」
（花嫁を待たせるものじゃないわ）
授業中、寝てちゃダメなんだよ。口を尖らせながら、よくそんな風に叱られた。そのことを思い出して、智也は小さく微笑んだ。
「そうだな……。もう、行かなくちゃ」
（うん。行ってらっしゃい）
頷くと、智也は踵を返して歩き出した。その背中に、彩花の呼びかけが届く。
（智也……）
「なんだい？」
振り向かず、智也は足を止めて答えた。彩花は泣いているのかもしれない。そう思ったから、振り向かなかった。
（おめでとう。幸せに……なってね）
「……ああ。ありがとう」
智也は再び歩き出した。振り向くことなく、ゆっくりと。

＊

教会の控え室で、ウェディングドレスをまとった花嫁が座っていた。
純白の衣装が、彼女の美貌を引き立てている。
控え室に遊びに来た彼女の友人たちも、その姿にため息をつくばかりだった。
……けれど、肝心なものが欠けていた。花婿が来ていないのだ。
予定の時間まで、あと五分ほどしかない。
それでも花嫁……詩音は静かにじっと座っていた。――手にした本を読みながら。
「えーっ、智也の奴、まだ来てないのー？」
「花嫁を待たせるなんて、サイテーですぅ」
「ほんっと、相変わらず甲斐性なしね、あの子は」
「ですよねー？　もう、こうなったら、俺が詩音ちゃん、さらってっちゃおうかな？」
「ふーん。信くんの本命って、やっぱり詩音ちゃんだったんだ」
「えっ……ちょ、ちょっと、それは誤解だよ、唯笑ちゃん」
「……大丈夫です」
詩音の心配を和らげようと、みんな必要以上に騒いでいる。その心遣いは詩音にもわかっていたが、彼女には、不安はなかった。
智也には、今日、どうしてもやるべきことがあった。それだ

けなのだ。
「あのひとは、大切な人に報告に行ったんです」
「……え、それって詩音ちゃん、もしかして……」
「もうすぐ戻ります。……ほら」
どたどたと廊下を駆けてくる足音が聞こえる。
全員の視線がドアに集中したとき、ノックもなしにいきなりそのドアは開かれた。
「ご……ごめん、詩音、遅くなって……」
息を切らしながら部屋に入ってくる智也。しかし、彼を迎えたのは詩音以外の人間からのブーイングだった。
「おっそーい。何考えてんの？」
「花嫁の控え室を、ノックもなしに空けるって無神経ですぅ」
「ちぇっ……来やがった」
「な……なんだ、お前らもいたのか」
「いたのかじゃないよー！　唯笑たちだって、心配してたんだからね。詩音ちゃんの気持ちも考えて……」
「――教会では、お静かに」
静かな、しかしよく通る声が響き、誰もが思わず首を縮めて沈黙した。ここにいるみんなが、一度は図書室で同じようにたしなめられたことを思い出していた。
詩音は立ち上がり、智也に近づいた。
白い手袋に包まれた手を伸ばし、智也のネクタイの歪みを直してやる。
そして、智也の全身を見つめたあと、微笑んだ。
「よくお似合いです」
「あ、ありがとう。……詩音のほうこそ、……綺麗だよ」
「……ありがとうございます」
詩音が頬を染めてうつむく。
「ひゅーひゅー。お熱いねえ、少年少女」
「……小夜美さん、俺たち、もう二六なんですけど……」
「そうよ、それであたしは三十路一歩手前……だから何？」
「いや、誰もそんなことは……」
「ま、まあまあ……。じゃあ智ちゃん、唯笑たちは先に行ってるからね」
控え室にふたりきりで残され、智也はもう一度詩音を見つめた。
雨はやみ、窓から柔らかな日差しが差し込んでいる。その光の中、静かに佇む詩音。
……綺麗だ。
それしか、言葉は出てこなかった。
「喜んでくれましたか……？」
智也の顔を見つめ、優しく微笑みながら詩音が云った。智也も笑顔で、頷き返す。
「……ああ」
「よかった……」
呟きつつ、詩音は智也の胸に顔を寄せた。智也はその体を受け止め、そっと抱きしめる。
そして、誓いの言葉を、口にした。
「天使が祝福してくれたから……きっと、幸せになる……。俺が……幸せにするよ……」
「……はい……」
小さく頷く詩音。閉じたまぶたから、涙がこぼれて落ちた。
「幸せです……私……」
鐘の音が響く。
固く寄り添うふたりを天使が抱きしめ、白い羽根が祝福するようにふたりを包んだ。

了

あとがき

おいおい、結婚させちゃったよ……ってところでしょうか（笑）。
智也が彩花に結婚の報告をしに行くところを書きたかったんですよね。
なので、このお話の主人公は彩花です。
ご感想などいただければ幸いです。

二〇〇一・三・一三

近くて遠い　-'Angel' side-B-

今日は、智也が会いに来てくれた。
タキシードなんか着ちゃってさ。悔しいけど……ちょっと、かっこよかったかな。
いちばん嬉しかったのは、智也に私の声が聞こえたこと。
いつも、どれだけ呼んでも聞こえなかったのに、今日は……今日に限っては。
そう――こんな日になってやっと、私の声が彼に届いた。
それがいちばん嬉しくて……、いちばん、悲しかったこと。

……私って、イヤな子だ。
どうして、泣いているんだろう。どうして、涙がこぼれてくるんだろう。
幸せになってね。その言葉に嘘はないはずなのに、どうしてこんなに胸が痛むの？
それなら、もう、いっそ……。そう、いっそ……。

智也が私のことで苦しむ度に、もう、忘れていいよって思ってた。私のことは、もう忘れていいよって。
だけど、違ったの。本当は、私が、忘れてしまいたかった。
二度と触れられないなら。声も、想いも届かないなら。記憶さえ、消してほしかった……。
でも。それでも。
忘れたくない。覚えていてほしい。
ただ痛みを残すだけでも……。

だから、私は、イヤな子なの。

本当はね、わかってるの。詩音ちゃんが前に教えてくれたから。
智也は、私のことを忘れて、詩音ちゃんを選んだんじゃない。乗り越えて、前に進んだだけ。
私だけが、同じところで立ち止まっていたの。
だから……もう、行くね。
私も、前に進まなきゃ。
いつか……いつかまた逢えるそのときまで。ずっとずっと、幸せでいてね。
約束だよ……。

＊

「天使が祝福してくれたから……きっと、幸せになる……。俺が……幸せにするよ……」
「幸せです……私……」
鐘の音が響く。
固く寄り添うふたりを天使が抱きしめ、白い羽根が祝福するようにふたりを包んだ。

了

あとがき

彩花の独白です。
タイトルどおり、彩花のマキシシングル「近くて遠い」をモチーフにしています。
ゲーム中ではただひたすら智也の幸せだけを願う、まさに天使のような彼女ですが、実際にはこんな葛藤もあったと思うんですよね。この歌を聴いて、私は彩花が好きになりました。
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一・三・二二

For nowadays

『朝ですよー、起きてくださーい』
「ん……あと十分……いや、五分でいいから……」
『ダメでーす。今日は一緒に絵を描きにいくって約束したじゃないですかー』
「わかった……じゃあ、あと三分……」
『往生際が悪いですよ、智也さぁーん』
強引に布団が剥ぎ取られる。窓も全開にされ、まだ寒い二月の風が吹き込んできた。
「さ、寒いよ、みなも」
『えへへー、だったら早く起きて着替えてくださいねー』
太陽のような笑顔。北風さえ忘れさせるそのぬくもりに、俺はようやく全面降伏して布団から起き上がり――。
そして、知るのだ。あの笑顔が、もう失われていることを。
カーテンを開け放した窓からは、暖かい日差しが差し込んでいる。夕べ、カーテンを閉め忘れて寝てしまったらしい。
その窓をぼんやり眺めながら、俺は考えた。
……以前は、あの窓を叩いて起こしに来る少女の夢をよく見た。
そして、今は――。
「……っ」
どうしようもなく、涙がこぼれる。
俺は……俺は、同じことを繰り返しているだけなんだろうか？
いつも……なにもできなかった。俺に、人を好きになる資格が、あるんだろうか。
膝を抱えて、うずくまる俺。あの日と同じように。そうだ、もう動けない……。
そう考えたとき、彼女が、耳元で囁いた。

（違うよ、智也さん）
「みなも……？」
（智也さん、優しかった）
「それが……なんになった？　なにもできなかったじゃないか！　みなものために……なにも……してやれなかった……」
（ううん……わたしを、海に連れてってくれたじゃない）
「……」
（金色の海……。嬉しかった。智也さんとの約束が果たせて）
「みなも……」
（デートも、してくれたよ？）
「一回だけじゃないか」
（うん……でも、いいの。わたし、智也さんと逢うときはいつも、これが最後かもって考えてたから）
「……」
（だから……だから、そのときそのときを、とっても大事にしてた。今この一瞬が、かけがえのないものだから……）
「みなも……」
（智也さんだって、ほんとはわかってるんでしょう？　大切なのは『今』。前へ進まなきゃ）
彼女の気配が、遠ざかっていくのがわかる。
俺は思わず立ち上がって、叫んでいた。
『待ってくれ、みなも！　俺はまだ……』
（前へ……前……へ……）
囁きが、かすれていく。
なにかを、引きとめようとして、手を伸ばしたとき――。
部屋のドアが、開け放たれた。
「おっはよー、智ちゃん。朝だよーっ！　……って、あれ？

もう起きてた？」
「唯笑……」
茫然と部屋の真ん中で立ち尽くす俺を、唯笑が怪訝そうに見つめた。
俺の顔に残る涙の跡に気づいたのか、心配げに眉を寄せる。
「どうしたの……？　なにかあったの？」
「い、いや、なんでも……。唯笑こそ、どうしたんだ？」
わざと背中を向けたままで俺は答える。赤い目を見られたくなかった。
俺の様子がおかしいことに、唯笑は当然気づいていただろうが、なにもそのことには触れずに、いつもの調子で話を続けてくれた。
「どうしたじゃないよぉ。今日は海を見に行くって約束したじゃない」
「海……？」
「そうだよ……。あの、オチバミした海……」
そういえばそうだった。だから、あんな夢を……？
黙りこんでしまった俺を元気付けるように、唯笑が笑顔でさらに声を張り上げる。
「もう、みんな待ってるんだからぁ。早くしないと、どんな目に遭うか、わかんないよ？」
「みんな……？」
「うん。ほら、下見て」
窓を開けて、玄関の前を見下ろす。そこにはいつもの連中がたむろしていた。
顔を出した俺に気づき、次々に悪態をつき始める。
「あーっ、やっっっぱりまだ寝てやがった。早く出てこいよ、智也！」
「年上の女を待たせるなんて、偉くなったわねー？」
「これは当然おごりよね」
「……紅茶、冷めますよ」
口々に勝手なことを云いやがる。誰もが、笑顔のままで。
そして、俺の隣には、最高の笑顔があった。
「ね？」
自然と笑顔を返してしまう。
そうだ、今のこの笑顔のために、俺は……前に、進まなきゃ……。
「……ちぇっ、好き勝手云ってるなあ」
「寝坊するほうが悪いんだよーん。早く着替えなよ」
「……了解。ところで、唯笑……」
「ほえ？」
「俺の着替え、見たいのか？」
「……！　み、見たくない、見たくないよ！」
顔を真っ赤にして、慌てて唯笑は部屋を飛び出していく。
去り際にドアから顔を出して、「早くね」と念を押すのは忘れなかったが。
俺は手早く着替えをすませながら、今日のことを考えた。
弁当は誰が作ってくれたんだろう？　唯笑か？　それは危険だな……。小夜美さんだと、変なパン持ってきてそうだし……。かおるや双海はどうだろうな？　信は問題外として……。
玄関に出ると、唯笑が立っていた。手にした包みを嬉しそうに見せる。
「じゃーん。お弁当作ったよー」
「……」
「ほえ？　どうしたの？」
「……嬉しくって、言葉が……」
「ほんとぉー？　今日は素直だねえ、智ちゃん」
相変わらず疑うことを知らない唯笑が、満面の笑みを見せる。
俺は苦笑いしながら玄関を出て、待っていてくれる人たちの輪に加わった。
そうだ……前に、進まなきゃ。

（前へ……前へ……）
彼女の囁きが、最後にもう一度だけ聞こえた。

了

あとがき

ようやく気持ちが落ち着いてきたので、書いてみました、みなもシナリオ。
やっぱこういう形にならざるを得ないですね（涙）。あのあと、奇跡的に回復しました、ばんざーい、とはやはり考えられない……。
ほんとはもっと長いお話を考えていたんですが、今はこれが限界です（涙）。
タイトルはみなものテーマからいただいていますが、内容的には「This may be the last time we can meet」です。あの歌詞、みなもシナリオとかぶりすぎ（涙）。
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一・三・一四